

急速に普及したALの「現状」と「課題」

アクティブラーニング型の授業の導入で、大きく変わろうとしているのは、藤沢清流高校だけではなく、アクティブラーニングをめぐる教育現場の変化を追いかけました。

取材文／松井大助 撮影／平山諭

日常の授業をキャリア教育にしたい、 そう考えた先生たちが興味をもった

アクティブラーニング(以後AL)型

授業への関心が高まっているが、そこにたどりつくまでの経緯は、実は先生方によってだいぶ違う。どのような先生がどういった思いからこの分野に引き寄せられたのか、そして今、どこに課題を感じているのか。ALをめぐる高校の現場の動きを、産業能率大学の教授である小林昭文先生と、入試企画部長である林巧樹氏にお聞きした。小林先生はAL型授業指導の講師として、林氏はALを学ぶセミナーの企画担当者として、2000年代終盤から現在まで高校の先生たちとかわり続け、ALの普及を後押ししてきた立役者だ。

そのお二人が、AL型授業に引き寄せられた先生のタイプの一つにあげる

のが、キャリア教育や総合的な学習の

時間のプログラムを担当してきた先生だ。総合的な学習の時間などで行ったグループワークや探究学習に、生徒が主体的に、生き生きと取り組むのを目にして、教科の授業も同じようにできないか考えるようになる。

そもそもとして、元高校教師である小林先生がまさにその一人だった。小林先生は、最終勤務校の埼玉県立越ヶ谷高校で、2007年度よりAL型の授業に取り組んできた。

「私の物理の授業では居眠りをしていた生徒が、キャリア教育のグループワークでは活刺としているんです。社会学の本を読む中で、これからの社会では主体性やコミュニケーションの力が問われるという認識も強まっています

た。そこで、生徒たちが調べたり話し合ったりして自ら学ぶ物理の授業を目指したのです」

また、特別プログラム頼みのキャリア教育に限界を感じた先生たちが、普段の授業の意義を見つめ直す中で、ALに向かったケースも多い。

産業能率大学で、2007年度より高校の先生向け「キャリア教育推進フォーラム」を企画してきた林氏も、そうした先生と何人も遭遇してきた。「募集担当として高校訪問を重ねる中で、キャリア教育の重要性や、先生方の要望に気づきフォーラムを始めた

各地の高校を回るようになると、小林先生や林氏は、キャリア教育の文脈とは違うところでも、ALを取り

のですが、先生方がよくおっしゃっているのは、「イベント型キャリア教育だけでは、生徒の主体性や社会的な能力を高めようにも定着しにくい」ということでした。「日常の授業そのものをキャリア教育にすべきではないか」と。

そうした際に小林先生のことを知り、授業を拝見してこれはすごいと思い、2009年の第3回フォーラムで公開授業をしてもらったのです」

小林先生と林氏は、次第にフォーラム以外でも、AL型の授業に興味をもった各地の高校から講師に招かれるようになった。

進路多様校の先生も、進学校の先生も、 従来の授業の閉塞感を打ち破ろうとした

入れる土壌ができていたことを実感したという。従来の教科授業に、多くの先生が漠然とした行き詰まりを



産業能率大学 経営学部教授 小林昭文氏

1952年生まれ。空手のプロを経て、埼玉の県立高校教員として25年間勤務したのち、定年退職。2014年より現職。河合塾 教育研究開発機構 研究員も兼任。教員時代にカウンセリング、コーチング、アクションラーニング、メンタリングなどを学び、最終勤務校では物理のAL型授業を実現。現在もその研究と実践、啓発活動に取り組む。

●産業能率大学キャリア教育推進フォーラムの参加者数

| 開催年 | テーマ | 開催場所 | 参加者数 |
|-------|--|------|------|
| 2007年 | キャリア教育の意義と展開について | 横浜 | 82 |
| 2008年 | キャリア教育を推進する組織をつくる | 東京 | 99 |
| 2009年 | キャリア教育と教科学習との連動 ～キーワードは協同学習～ | 東京 | 97 |
| 2010年 | キャリア教育と教科学習との連動・第2章 ～学習者中心の学びと学力向上の関係性について～ | 東京 | 105 |
| 2011年 | 高校・大学での学びを汎用的能力の育成につなげる ～大学・企業の視点から高校教育を見つめる～ | 東京 | 115 |
| 2012年 | アクティブラーニングにより教科学習とキャリア教育の連動をはかる ～学びの探求と活用をはかるために～ | 東京 | 94 |
| | アクティブラーニングで12年間をつなぐ ～学びの探求と活用をはかるために～ | 名古屋 | 58 |
| 2013年 | 学習意欲を高め学力向上につなげる授業改革 ～授業研究会を通じた効果的な教員同士の学び合い～ | 東京 | 190 |
| | 学習意欲を高め学力向上につなげる授業改革 ～現代の子供たちに適合した指導方法について熟議を通し考える～ | 名古屋 | 128 |
| 2014年 | 学習意欲を高め学力向上につなげる授業改革 ～時代が求める学力を育む～ | 東京 | 247 |
| | | 名古屋 | 119 |

感じていて、なんとかしようと思っていたからだ。

その傾向はまず、進路多様校など、教科学習への意欲が低い生徒を多く抱えた高校でよく見られた。

「懸命に教えても、居眠りをする生徒や、授業をさぼる生徒が出てくる。叱つても生徒はやる気にならない。先生方からよく聞き出したのは『この先もこんな授業でいいのか迷いはあったが、どうすればいいのかわからなかった』という声です。そうした先生方が、ALの研修に参加されると、生徒が寝なくなることや意欲的になる効果を強く感じるようで、数年前から急速に広まってきました」(小林先生)

さらにここ1、2年は、進学校の関心も如実に高まっているという。

「授業を成立させようとALを始めた学校で、生徒の意欲だけでなく学力も向上した。そうした実績が知れわたるようになったのです。私たちのセミナーへの依頼も、以前は関東中心でしたが、ここ2年ほどで、北海道や東北から、関西や九州・沖縄まで全国に広がり、しかも進学校の先生方に呼ばれることが中心になりました。これまでではゴリゴリの知識詰め込みで頑張ってきた、という県の先生方からもお声がけいただいています」(林氏)

「進学校の先生方が、ALを取り入れた理由を、おもしろい表現で語ってくれたことがあるんです。『我々はもうこれ以上、早口でしゃべれない』と(笑)。『どうすれば時間効率よく生徒に知識を詰め込めるかを考えてきたが、もうこれ以上はできないと思っただ。ところが、教師が伝えるのではな

新学習指導要領などの文科省の発信、 教員のネットワークも、普及を促した

林氏はまた、文部科学省からの発信の効果も大きかったと感じている。

2012年の中央教育審議会の答申より、大学教育で推進する取り組みの一つに「アクティブラーニング」という言葉が使われるようになった。2013年度より全面实施された新学習指導要領では、「確かな学力」として、知識・技能の習得だけでなく、思考力・判断力・表現力等や、学習意欲の育成も大事とされ、双方向型の言語活動の充実も謳われた。

「そうした情報をきちんと追いかけてこられた先生方が、どうすればALや双方向型の授業をできるかと、フォーラムやセミナーにいらしてくださいようになったのです」

もう一つ林氏が感じるのは、「先生

く、生徒が自ら学ぶようにしたら、生徒の意欲も上がり、知識の定着率も上がった」と。セミナーなどでこのお話をすると、その場の先生方も共感される人が多いですね」(小林先生)

つまりは、生徒の学習意欲を高め、学力を向上させる手法としても、ALが注目を浴びるようになったのだ。

たちが横のつながりを築きやすくなった」という環境の変化だ。

「フォーラムやセミナーに参加された先生方が、SNSなどインターネットを中心にその後も交流や情報交換をすることが増えました。私たちもフォーラムを、単にインプットの場としてだけでなく先生方のネットワークづくりの場と考えて運営しています」

産業能率大学のフォーラムは、上の表のように、2009年よりキャリア教育と教科学習の連動の方向に舵を切り、2013年には定員オーバーに。2014年の東京・名古屋両会場とも、受け入れ人数を増やしたにもかかわらず、全国からの参加申し込みで、受付開始から1カ月足らずで締め切りとなるほど、大盛況となった。



産業能率大学 入試企画部長
林 巧樹氏

1959年生まれ。産業能率大学の職員として各地の高校を訪問。1998年より高校教員向けに授業力向上セミナーを、2007年からは同じく「キャリア教育推進フォーラム」も開催、キャリア教育やアクティブラーニングに関心のある先生方の一大交流の場となった。2007年度から入試の一つとして、高校でのキャリア教育の成果を評価して選考する「キャリア教育接続入試」も創設。

見えてきたこれからの課題 実践する先生たちの悩みとは

もつとも、高校の授業にALがしっかりと根付くには、まだ超えなければいけないハードルがある。

ALのフォーラムなどの参加者は、現時点では、林氏のみどころ「自分でもすでに何らかの実践をされている先生方が半分くらい、これからやってみようとする先生が半分くらい」。その先生たちが、それぞれの立場で課題を抱えているからだ。

課題① 授業中の生徒へのかかわり方、教師の役目がよくわからない

真つ先にあげられるのが、授業中の生徒へのかかわり方がよくわからないという悩みだ。生徒がグループワークや演習をしているとき、教師は何をすればいいのか。自分が手持ち無沙汰になりそうなことへの戸惑いや、生徒が騒いだり消極的だったりと期待どおりの活動をしてくれないのではないかと、いつ不安がある。

そこで問われるのが、生徒が発言や学習をしやすいように場づくりや介入をする、いわゆるファシリテーションのスキルなのだが、「ともするとそれが非常に難しいことのように宣伝され

る」と小林先生は語る。

「カリスマ性やタレントのある人でないといけないように思われているふしがあるんです。ファシリテーションは技術を身につければ発揮できるリーダーシップであって、カリスマ性で生徒をぐいぐいひっぱるのは別物だ、と理解することが大事だと思います」

課題② グループワークが能動的、協働する形にならないことも

一見、グループワークがうまくいっているようで、実は生徒が能動的に学習していないケースもある。

「誤解を恐れずに言えば、日本では小中学校のころから軍隊型のグループで活動することが多いんですよ。頭脳労働をするリーダーとサブリーダーがいて、手足となる中間層がいて、何もしない傍観者がいる、といったように。だから生徒は、グループ分けされると、周囲を見て自分の置かれたヒエラルキーを察知し、その役目だけ務めようとしています」(小林先生)

するとどうなるか。考えて指示を出す生徒がいる一方で、指示に従って動くだけの生徒もいて、お互いが主体的に学び合うのとはほど遠いグループになる。ゆえに「グループワーク」は、イコール「協働学習」ではない」ともよく言われるそうだ。

「ビジネス界に名を馳せた理論家のピーター・センゲの著書、『学習する組織』にもありますが、変化の激しい今の社会では、メンバー全員が能力や気づきを高め、環境に合わせて組織そのものが進化していくことが求められます。仮にグループワークでよい発表や成果物が生まれたとしても、上意下達の軍隊型の活動での結果なら、グループそのものは予定調和で進化していません。その場合は、生徒一人ひとりの主体性や協働する力も、あまり伸びていない、と認識したほうがよいと思います」(小林先生)

課題③ もたらず効果に目を奪われて本質的な目的を見失うことも？

授業にALがどんどん取り入れられる中で、いつしか先生たちが、生徒が上手に話し合ったり発表したりするといった、見た目の変化に満足してしまつ、という懸念もある。

その点に関連して小林先生が思うのは、「皆さん、『学習の結果として身につく力』のほうに、目が向きすぎていないか」ということだ。

「生徒の協調性を伸ばしたい、意欲を高めたい、学力を向上させたい。ALを始める入り口は何であつてもいいと思うんですね。ただ、先を見すえた時に頭に入れておかなければいけないことは、『これからの世の中はどうなるかわからない』ということだと思っんです。『これとこれさえ身につければ幸せになれる』とは生徒に教えられない。だから力をつける土台として、生徒を『死ぬまで自分で学習し続ける人』に育てることが大事であつて、それがキャリア教育の根幹だと思つてます」

その自分で学習し続ける人になるために不可欠なのは、OECDの定義したコンピテンシー(能力・行動特性)でも中核にすえているものだとして小林先生はとらえている。

「リフレクション(自己内省)です。体験をふり返り、気づきを得て、自己修正していく。ALの授業で生徒がそのプロセスを学ぶことが重要だと思つます。そしてそのリフレクションをすることで、主体性や協働する力、必要な知識や技能も身につけていくのです」

13〜18ページでは、この核心を踏まえたうえで、ALに取り組むときのポイントを小林先生にレクチャーしていただく。